

別記様式（第3条関係）

開催記録

名 称	第4回公共施設検討有識者会議
開催日時	平成25年7月13日 13時00分から15時30分まで
開催場所	猪苗代町体験交流館 「学びいな」
出席者	【有識者会議委員】 柴崎恭秀、北川圭子、柿沼整三、濱尾博文 【事務局】 まちづくり政策課：渡部まちづくり政策係長、渡部主任主査
議 題	公共施設の検討について
資料の名称	なし
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
内容	
<p>※ 会議開催前に施設見学を実施</p> <p>1. 開会</p> <p>2. 協議</p> <p>（委員）あと1回、ないし2回程度の会議で、8月中には有識者会議の意見をまとめたいと考えている。まずは各委員から説明してほしい。</p> <p>（委員）これまでの3回の会議を踏まえて、自分の考えを整理した。様々な方向性があり、どれをとっても間違いではない。何を重視するか考えた結果、住民の利便性を追求すべきとの判断に至った。有識者会議での検討にあたり、庁内検討会の検討結果として、4案が事前に示された。有識者会議として、4案のいずれか、あるいはこれらの折衷案を考えなければならない。全国的に同じような事案を抱えている例も多くあり、同程度の規模の自治体もある。美里町と同様に分庁舎方式でスタートしたが、新庁舎建設に踏み切る事例も多い。比較的機能が独立している教育委員会を旧庁舎に留める事例も少数みられるが、新鶴庁舎の維持費を考慮すると、総合庁舎にまとめるのが有利であると考え</p>	

る。従って、2案をベースに考えを整理した。まず、新庁舎建設か分庁舎型かについて。前段で触れたように、ほとんどの事例で新庁舎建設に踏み切る場合が多い。理由としては、住民の混乱や利便性、職員の往来による時間的ロス、複数の庁舎を利用することによる維持費等の経済的ロスがあげられる。また、ソフト面として、これから育つ子ども達は「美里の子」である。旧町村がそれぞれ主張すると「故郷としての美里」を意識しにくくなる。合併したのだから「美里の子」として育つためにも、新庁舎建設を一つのきっかけにすることも考えられるのではないか。また、今後高齢者が増えていくなかで、業務の横の連携も必要となることから、庁舎を一つにした方が良いと考えられる。次に現高田庁舎改修か解体かについて。これまでもいろいろと議論があったが、歴史的に価値があるものかどうか、また設計者も現段階では分からない。解体後に歴史的価値が判明した場合を考えれば、大変悩ましいところではあるが、耐震補強の経費などを考慮すると、改修ではなく解体に踏み切るべきではないか。次に建設地について。本来であれば、市街地に近く、住民に親しみ深い場所であり、コンパクトシティや市街地活性化の視点からも現高田庁舎の場所が望ましい。しかし、美里公民館の老朽化から複合文化施設を望む町民の声が多いことを踏まえると、手狭であり、高田中央地区非農用地が適切ではないか。ただし、冬季の北西の風が強いということで、防風林などの配置計画が十分考慮されなければならない。現庁舎から1kmほど離れているが、駅や民家群からも1km程度であり、遠すぎるという距離ではない。次に新庁舎規模について。総務省の資料から約5000㎡という数値がでていますが、もっと削減することが可能ではないか。ゾーニング計画などで削減できる余地はあるだろう。また、他市町村の事例をみると、国土交通省の数値を使っているところもあり、あわせて掲載すべき。定年による職員減と人口減の経年変化も予想してほしい。次に新庁舎を建てるとして、これは先の話ではあるが、地元の気候風土を熟慮した設計でなければならない。地元産の木材を利用し、できれば木造が良い。次に新鶴庁舎・本郷庁舎の活用について。ここが一番頭の痛いところではあるが、町ぐるみで、職員一丸となって企業誘致を行う必要がある。使用しないと老朽化が進む。また、住民感情を尊ぶ意味で窓口サービスを検討してもよい。庁舎の話とは直接関係ないが、前回話題になった高齢者住宅について。30年ぐらい前からいろいろな自治体を実施しているが、成功・失敗以前の段階で、お年寄りが利用しない。北海道でも、冬は高齢者が利用し、夏は観光客が利用する方式は一見良さそうに思えるが、機能していないのが現実のようだ。美里の高齢者の方も故郷意識が高いと思うし、まず高齢者が動かないだろう。実施するのであればアンケート調査を実施し、そのうえで方向性を決めるべき。次に観光・住民の故郷意識について。首都圏への観光アピールが必要だろう。会津鉄道の利用について東京の人たちはあまり知らないのではないか。会津全域だけでなく美里に特化したPRが必要と思う。また、会津若松の観光客を美里に引っ張ってくる意気込みが必要だろう。いずれにしても、多岐にわたる問題であり、何を優先するかによって答えは変わる。正解がある訳ではない。住民の利便性を主体に

考えた結果である。

(委員) 可能性のマトリックスを検証する作業を行った。高田・本郷は街道があって、あるいは産業があって町がまとまってできている。それに対し、新鶴はある一定の小さな集落が点在している。散村に近いような点で散っている地域である。①から④までが庁内検討会で検討した内容である。可能な限りの組み合わせを検討し、⑨まで示した。複合文化施設は、駐車場の確保の問題などから高田中央地区非農用地に限定した。⑤は高田庁舎を新築改修して分庁舎を継続する案。⑥⑦は3つあるうちの2つを統合し、将来は1つにする案。⑧は新鶴を総合庁舎にする案。⑨は本郷を総合庁舎にする案。ここから、時間軸を取り入れたシミュレーションを行っていくと、1つの方向性に向かっていくのではないかという仮説を立てた。結局は②案に帰着する。将来的には本郷・新鶴庁舎も旧くなる。その時に新しく建てることはないのではないか。美里として30年、40年先を見据えたときに、最後には1つになるだろう。その点を踏まえ、検討してみた。高田中央地区非農用地を活用し、高田の新設庁舎を可能な限り小さくつくる。まず、2020年頃までを目安に新鶴を統合する。それから10年後、2030年頃になれば本郷庁舎も築40年近くになり、設備改修も必要となり、その段階で本郷を統合し、必要な増築を行う。新鶴庁舎は新しく、空調の個別管理ができるので、転用もしやすいのではないか。将来的には町全体の集落が高齢化、限界化していき、点在化していく。高田・本郷も同じ傾向になる。小さな点(集落・企業)が情報発信や経済活動を行い、生き残っていく時代になるのではないか。点のネットワークを構築する手法を行政として模索してはどうか。小さな単位での行政サービスをどう構築していくか。『地域型スマートグリッド』と名付けた。将来的には高田中央地区非農用地に集約した庁舎で、点の行政サービスを構築する。矢祭町では職員の自宅を拠点とした行政サービスを行っている。自治区長に行政サービスの一部を委託するような形も考えられる。繰り返しになるが、分庁舎を継続したとして、いずれ施設が老朽化した場合、新たに建てるということにはならないだろう。これから新築するものを小さな単位にしておいて、将来統合するときに増築する。木造の平屋で有機的な空間を建築として提案できればいい。規模についてはよめないところがあるが、まずは2000㎡程度でスタートし、最終的には1つにまとまれるのではないか。

(委員) 庁内検討会で示された4案をベースに、建築設備の専門家として意見を述べる。本郷・新鶴庁舎が新しい状態。それに対し高田庁舎はかなり旧くなっている。これをどうするか。一方、3庁舎が存続している状態と住民の気持ちが違う形で具現化できないか。複合文化施設は町全体のシンボルとして新たにつくっていく。3つの地域の住民感情を1つにまとめ上げる最初のアドバルーンとして、高田中央地区非農用地を新たな地域として、複合文化施設を建設し集約していく。また、美里公民館跡地に「情報・防災センター」を建設する。現在の高田庁舎の欠点を補うことを一つの目標に掲げる。本郷と新鶴の庁舎はまだまだ使えるので、町全体の連携を図るために、その中心となる情報

センター兼防災センターを建てる。情報・防災センターの近辺に将来的には総合庁舎が建設されることも考えられる。今後の高齢化社会を乗り切る方法として、3つの地域の連携による住民サービスを考えていく。情報・防災センターが核となり、本郷・新鶴庁舎のIT化を進めていく。本郷・新鶴庁舎もそれぞれ築17年、15年が経過しており、一般的に築20年を過ぎた頃から建築設備の老朽化が始まっていくため、IT化をきっかけとし、両庁舎の機能が再生できるような設備改修を行う。住民感情として、高田、本郷、新鶴とも主要なものは残っている、将来的には安全安心の拠点として1カ所に集まることを表すことができる。その後に高田庁舎のあり方を検討してはどうか。最終的には高田に一本化された庁舎を建設するイメージはもっている。複合文化施設を高田中央地区非農用地に建設し、同時に情報・防災センターをつくることによって、3つの庁舎と複合文化施設がITによりネットワークが構築される。地域的な小さなスマートグリッドが具現化される。最終的には会津美里町庁舎と密接に関連した情報・防災センター、複合文化施設がネットワーク化される。大まかなタイムスケジュールを掲げた。文化施設建設は2015年頃完成、情報・防災センターは2016年頃完成、新鶴・本郷庁舎のIT化改修は2020年、2030年から2040年は人口分布で大きな割合を占める高齢者の割合が今と変わってくるだろう。その段階で庁舎の集約化を図った方が全体的に効率的だろう。

(委員) 情報・防災センターの意見と最終的には合わさると思う。防災ネットワークという専門的な立場から考察した。原発事故でJヴィレッジが機能した。想定してあの場所にスポーツ施設があったのか、偶然だったのかは分からないが、情報・防災センターとしてJヴィレッジが機能したのは事実である。『稀に起きる災害』は、建築土木領域での目安として50年に1度というのがある。人生80年の中で誰でも1度は遭遇する災害レベル。その対策としては、すぐに復旧できる、短期間で復旧できることを目標とする。『きわめて稀に起きる災害』は500年に1度の災害レベル。そういうときに町としてどうあるべきか。道路や鉄道、通信、電力が寸断されたときに会津美里町が対応できるのか。最も懸念されるのが会津平野の活断層。400年前にも地震が起きている。確実に『きわめて稀に起こる災害』に分類されるだろう。その他、洪水、ダムの決壊、会津磐梯山の噴火、記録的大雪、戦争、原発事故・核爆弾による放射能汚染も考えられる。それに対し、美里町はどういう対策をとっていくか。会津盆地は特別な地域のような気がする。地理的な優位性をもっているが、大規模な災害の時には孤立するリスクが高くなる。四方八方に道路網が整備されているため、長期間道路が寸断されて孤立化することはないだろう。突発的な事故から、最初に乗りでくるのは自衛隊などと思うが、航空機の離発着の場所がない。会津空港がない。支援部隊の基地用地、緊急救助施設として応急収容所設営地、緊急通信・情報ネットワークとしては防災指令拠点や無線通信システム、安定した住民情報提供システムなど、緊急エネルギー供給システムとしては備蓄や発電のシステム、緊急飲料水食糧供給・備蓄システム、緊急医療支援システム、

応急仮設住宅供給用地の整備などが考えられる。情報・防災センターこそがこれから町が用意すべきもので、それに付随して中央とのネットワークづくりを進めていくことが必要ではないか。行政のスタンスとして、町民の安全安心を守るための情報提供と防災システムの提供が重要な仕事になっていくのではないか。諸証明の発行等の事務の比重が下がってくると思う。福祉や教育は独立していこう。その点を踏まえれば、今の庁舎はあまりにも弱すぎるので、時間軸を考えて、40年、50年先を見据えながら、今の庁舎を少しずつ整備していく。50年後のランドデザインをつかって、町民に対して時間をかけてメッセージを発信し、ひとつひとつ段階を踏んでやっていくことが、今の庁舎をムダにせず、効率的な行政運営につながるのではないか。本郷・新鶴について、現状でムダな部分はあるが、行政サービスはできている。なるべく現状のものをつかって、優先順位を付けて、緊急性の高いものについては、小規模のものをつくっていき、徐々に膨らませていく。副次的に総合防災拠点ができれば、企業の防災拠点を会津に置くことも考えられる。中央との太いネットワークがあれば、会津が首都圏のバックアップ機能を担うことも可能となる。町民に対する安全安心の施設を一生懸命考えれば、結果として、日本にとってのバックアップの都市になり、人口増加や情報量増加のランドデザインが描けるかもしれない。情報・防災センターを積極的に考えていけば、庁舎問題を解決する糸口になるのではないか。

(委員) 新たに情報と防災にウエイトをおいた提案が出された。会津地域は歴史的には水害の多い地域であった。400年ちょっと前に慶長の大地震があった。今回の震災の後で町として防災に対する危機感は変わっているのか。

(事務局) 地域防災計画の策定や議会の防災特別委員会の設置など、防災に対する意識は高まっているが、その対策として十分とは言えない。

(委員) 最終的に統合していく方向性は確認できたと思う。情報・防災センターに集約性を求めることや住民感情を一つにまとめる、美里の子など町として一体感を構築するためにどうするか。施設整備をきっかけにすることもできる。複合文化施設と高田の庁舎群と情報・防災センターをまとめていくところからスタートすることもありえる。防災と情報のネットワークの格付けをあげていく、将来的にはどう考えても分散化していくため、ネットワーク化が必要となる。小さな単位をどうまとめていくかが重要である。

(委員) 時間軸を追いかけながらどう整理していくか、分散ではなく統合していくことについては共通している。統合の仕方として抽象的な部分と具体的部分がある。「美里の子」「情報・防災システム」などが統合のキーワードになるのではないか。

(委員) 高田中央地区非農用地を拠点とし、現高田庁舎の場所や本郷・新鶴に出張所的なものを設置し、そこがまちづくりや観光の核となり、ネットワークを構築することも考えられる。半官半民のようなもの。

(委員) 案では、文化施設と情報・防災センターと庁舎が3つの軸になっているが、情報・防災センターと庁舎が1つになることは考えられるか。

(委員) 情報・防災センターと庁舎は非常に近い。イメージは美里公民館跡地に情報・防災センターを設置し、そこに附属する形でコンパクトな庁舎を考えている。高田中央地区非農用地には文化施設を建設し、その他の公共施設を統合していく候補地にしてはどうか。

(委員) 情報・防災センターの建設であれば、住民感情として庁舎をとられたという気持ちが薄まるのではないか。

(委員) 報告書としては、まず次回までに総括の文言を整理する。それを踏まえ、各委員がそれぞれの分野で文言を整理する形で進める。

3. その他

次回会議日程 平成 25 年 8 月 7 日 (水) 午後 1 時 30 分 役場高田庁舎

4. 閉会